

ロシア近代文学における ユートピア・コードと終末のコード⁽¹⁾

井 桁 貞 義

1-0 分析の視点：アメリカの研究者ノイエンスュヴァンダーは、注の1)に挙げたロシアのユートピア文学のうちシチェルバートフ(9)、ブルガーリン(21, 24, 25)、ウリィブリシェフ(18)、オドーエフスキイ(36)の作品を取り挙げて詳しく分析している。⁽²⁾ その分析の視点は次のようなものだ。

- i) ユートピア人の性質。道徳観など。
- ii) ユートピアの風景。厳密な都市構造か田園か、など。
- iii) 社会制度(教育／国家組織／家と家族／教会)。
- iv) 科学とテクノロジー。
- v) 文学上の考察。

この5つの視点はそれぞれのユートピア像を捉えるにあたって有効なものと思われる。私達は、まず、この方法にならって、しかし対象とする時期は拡大し、18世紀から19世紀末までのロシア近代文学全体の中のユートピア文学の大きな流れをつかみ、そのアウトラインと研究上の問題点を捉えることに努めたい。

1-1 ユートピア人の性質：ノイエンスュヴァンダーの指摘によれば、シチェルバートフ(9)、ウリィブリシェフ(18)およびブルガーリンの『ありそうもない夢物語』(24)において観察されるのはユートピア人たちの道徳心、理性の高度な発達である。いっぽうブルガーリンの他の2作およびオドーエフスキイの『4338年』(36)では、人間性に大きな変化は見られない、とされる。この指摘は正しい。

整理して言うなら、ロシアのユートピア文学には、人間の変化を語るものと語らないものがある。そして同一の作家でも、作品によって描き方の異なる場合も見られる、ということになる。

最初に述べたように、私達は考察の範囲を拡大しながら、ここでは人間の変化を語るものについて、さらに分類してみよう。

①ロシアのユートピア文学史上、最も初期の作品であるスマローコフ（2）では、皇帝は人民の福祉のみに心を砕き、聖職者は善行の規範を示し、裁判官は賄賂を受けることもなく、徒食者は軽蔑され、飲酒や蜜行もうとんじられる。これはシチェルバートフ型のユートピアの先行者といえよう。シチェルバートフ以後に理性的存在への変化を語るものとしてはたとえばチェルヌィシェーフスキイ（41）を思い出すことができる。

②理性的人間というよりも、愛による変容を説く作品の系譜をも追うことができる。マルコ福音書12章33節を引用する作品はリョーフシン（10）、ソログープ（37）、ドストエーフスキイ（43、47）と追うことができる。愛による統治はシチェルバートフ（9）、ウリブィシェフ（18）においても語られている。

③オドーエフスキイ（23）では地球と太陽の合体の日までに人間はいわば根源的な変容を終えている。不完全と偏見の時代は病気とともに駆逐され、「地球は全能の王者たちだけのすみかとなっている」という。地球と人間の物理的変化を語る『悪霊』のキリーロフの言葉（45）はこの〈超人たちの共同体〉の系譜につながる（その世界の詳しい描写はないけれども）。

④他方、ユートピアを黄金時代として回想する系譜がある。罪を持たぬ原初の人々の調和した世界を描くエミン（3、4、5）、ヘラスコフ（6、11、14）、リョーフシン（10）、リヴォフ（15）、ゴンチャローフ（40）、ドストエーフスキイ（38、45、46、47）がここにはいる。

1-2 ユートピアの風景：前項②④のように、ロシアが描かれる場合、それは家父長制の農村の風景であることが多い。ノイエンシュヴァンダーによれば、西欧のユートピア文学は明瞭に境界づけられた都市として描かれることが多く、シンメトリカルな計画のもと、人口調整を実施しつつビルディングを建設する、これに対して、ロシアのユートピア文学ではアンチ・アーバン感情が顕著に観察される、という。シチェルバートフ（9）のように大都市解体と自然への回帰をメッセージの一つとする作品を見るとき、この指摘は正しいもののように思われる。だが、ブルガーリン（21）、オドーエフスキイ（36、彗星による破壊を予定しているか？）を考慮するとき、このややわかりやすすぎる目安には留保が必要であると考えられる。

ロシア近代文学において注目すべきこととして〈実現したユートピアとしてのペテルブルグ〉という問題がある。ロモノーソフ（1）、ジェルジャーヴィン（8）、バーチュシコフ（16）、ヴァーゼムスキイ（17、26）、などからプー

シンキン（30）に向かう頌詩の系譜がこれである（ペテルブルグのイメージについては2—1および3—2も参照）。

1-3 社会制度：ロシアのユートピア文学においては、社会改革の力が全く無視されている，ウルィブリシエフ（18）とブルガーリン（24）以外では，同時代の社会とユートピアの社会ヴィジョンに根本的な違いは認められない，というのがノイエンスシュヴァンダーの結論である。しかし私達は考察の範囲を拡大する結果，この点に賛成することはできない。たとえばスマローコフ（2）では政権の中心には国家評議会が置かれ，軍隊はこれに属する軍事委員会によって統率される。裁判は法に則り，迅速に遂行される。教育によって学問，芸術，工芸にたいする尊敬の心が養われ，道徳心が植え付けられる。これらすべての描写は同時代の社会への批判を主たるモチーフとしていよう（なおかつ，西欧のユートピア文学に匹敵するほどの精密な社会設計が見られない，「国家の制限が少ないほど良いとされる」という指摘には，ある程度同意すべきかもしれない）。⁽³⁾

多くの作品が法の遵守に触れている点は，現実批判という面から注目される。自然法による長老支配（10）も見られるが，裁判制度，賄賂の否定，あるいはまた法の前での平等については繰り返し語られている（2，13，18，24，25など）。

宗教。シチェルバートフ（9）とウルィブリシエフ（18）において，ともに，宗教は啓示宗教から思索と明証性へと基づくものへと移行している。ノイエンスシュヴァンダーはここにトマス・モアの『ユートピア』の影を見ている。⁽⁴⁾

1-4 科学とテクノロジー：ノイエンスシュヴァンダーによれば，ロシアのユートピア文学においては，西欧において問題となる宗教と科学の均衡をとるといいうモチーフを見いだすことができない，宗教が語られるとき科学は問題とならず，科学がテーマとなると宗教は問われることがない，という。この観察は追認できる。

近代ロシアのユートピア文学全体を見ると，科学の評価についてきわめて強いコントラストを認めることができる。スマローコフ（2）において科学は価値あるものとされているが，リョーフシン（10）においては農業と牧畜以外の営為は無益とされ，科学は否定される。18世紀にすでにこのように見られた科学評価の対立はやがて，たとえば19世紀60年代のチェルヌィシエーフスキイ（41）とドストエーフスキイ（42）との〈水晶宮〉をめぐるポレミックへと持ち越される。

1-5 文学上の考察：空間または時間的に隔てられている〈どこにもない場所〉を読者に物語るには、現実の世界にいる読者とユートピアとを架橋する語り手ないしリアライズの方法が求められる。ノイエンスュヴァンダーの分析した作品のなかでは、航海の途中で嵐にあって難破するシチェルバートフ（9）の設定が最も西欧の方法に近い、そしてこれとブルガーリン（24）以外はみなロシアの地にユートピアを求めているのが特徴的だ、としている。けれどもリアライズの方法、ユートピアの設定は、近代ロシア文学全体を見渡す限り、もっとヴァリエーションに富んでいると言わなければならない。

リアライズの方法としてしばしば用いられるのは〈夢〉（リョーフシン10, ラディーシチェフ13, ソログープ37, ゴンチャローフ40, チェルヌィシェーフスキイ41, ドストエーフスキイ43, 45, 46, 47, ツルゲーネフ50）、〈難破〉（シチェルバートフ9, ブルガーリン21）、〈飛行〉（リョーフシン10, キュヘリバーケル20, ドストエーフスキイ47）などがある。なかには〈古書中の物語〉（ブルガーリン24）、〈磁気催眠中の手記〉（オドーエーフスキイ36）、〈回想〉（ドストエーフスキイ38）も見られる。

ユートピアが設定される場所としては、前記ペテルブルグ以外では〈モスクワとペテルブルグにまたがる都市〉（36）、ロシアの農村（37, 38, 40, 44, 52）、バルカン半島（28）、シベリア（20）、〈南極大陸〉（9）、〈他の天体〉（7—星を巡る, 10—月, 46—第2の地球）、〈地下〉（24）、〈ギリシャ多島海〉（45, 46）など。シチェルバートフ（9）ではロシア各地の地名が換えられて登場する。⁽⁵⁾

ユートピアが設定される時代としては、〈ロシア改革後300年〉（18）、〈29世紀〉（21）、〈2028年〉（25）、〈3448年〉（28）、〈4338年〉（36）、〈幼年時代〉（38, 40）、〈3000年前〉（46）など。

1-6 3つの理念型：ここまで私達はノイエンスュヴァンダーの研究を参考にしながらロシアのユートピア文学を追ってきた。ここで彼の研究を離れるにあたって、1—1から1—4までの観察を、もう一つの次元で組織化する視点を加えてみたい。

すなわち、1—1において理性を重要視するテキストの場合、1—2では都市を、1—3では市民社会の規則を、1—4では科学に対してプラスの態度を志向する傾向が強く、1—1において愛情による変容に注目するテキストは1—2で農村を、1—3で家父長制的秩序を、1—4で科学に対するマイナスの態度を志向する傾向がある。いま、今後の分析の作業仮説として、前者を「近

代市民社会志向型」，後者を「ロシア共同体志向型」と呼ぼう。そしてロシアのユートピア文学はこれにとどまらず，第3のものとして，人間の根源的変容を夢見る，いわば「超人／新人の共同体志向型」とでも言うべきものが存在する（23, 45）。この最後のものは，たとえばクプリーンのアナキストの連合体『乾杯』などをはじめ，20世紀の多くの国々のたくさんの作品につながる。

そしてこれらを表現する文学形式である1—5については，今挙げた3つの志向との明瞭，必然的な因果関係は認められない。

2-0 アンチ・ユートピア：ユートピア文学の歴史においてロシアが果たした貢献としてアンチ・アーバンとともにアンチ・ユートピアの創設を挙げる研究者もある。⁽⁶⁾ ユートピア文学が現実世界の批判として理想郷を描こうとするものであれば，これに対して，ユートピア世界の批判を目的とするアンチ・ユートピア文学は，理念的には，先行するユートピア文学が存在してはじめて成立するものである。これは2次的な，メタ・レヴェルの高いユートピア文学として捉えられるべきものである。

2-1 系譜：18世紀の頌詩の歴史を前提とし，これを批判し，そこに描かれたユートピアの光景からの排除を物語るプーシキン『青銅の騎士』（30）は，このような，ロシアのアンチ・ユートピア文学の早い表れの1つだろう。ドストエフスキイ（42）がチェルヌィシェフスキイ（41）を前提としていることは繰り返し指摘されてきた。ドストエフスキイ（51）の「大審問官詩劇」の源泉はさまざまなかたちで取り上げられてきているが，ユートピアの系譜のなかで，これはカンパネラ『太陽の都』のメタ化として捉えることができよう。

2-2 楽園追放と集団的排除：言うまでもなく，20世紀に至って，この領域は多くの追随者を見いだすことになる。いっぽうさかのぼってみれば，物語の構造自体は旧約聖書に見ることのできるものである。『青銅の騎士』中，〈神の怒り〉と言われるのはこの〈ジャンルの持つ記憶〉（バフチンの用語による）の発現にほかならない。〈アダムとイヴ〉は，やがて20世紀のザミャーチン以後のアンチ・ユートピアにも記憶されることになる。

3-0 ユートピアと終末：オドーエフスキイ（23）やペチョーリン（32, 33），ドストエフスキイ（43）では，終末がなんらかの変容の契機となって新たな世界の誕生へ向かう。この場合，終末はユートピア物語に組み入れられる一つの動機としての機能を果たす。ヨーロッパ文学にはこのタイプの物語の祖型

の一つとして黙示録があることはいうまでもない。いっぽう、この物語の構造のうち、変容／再生の契機を欠き、終末によってそのまま物語が終わるものもまた、存在する。つまり、

- i) 現実がなんらかの〈改革〉を経てユートピアへ向かう、とするもの。
- ii) 現実が全的破滅を通過したのちにユートピアへ向かう、とするもの。
- iii) 全的破滅を迎えて、人間社会ないし世界が終わる、とするもの。

これらはどれも「我々はどこから来て、どこへ行くのか」という問いかけに対して人間が用意してきた〈物語の制度〉として捉えることができる。

3-1 系譜：ロシア文学において終末の物語が1820年代の終わりに集中して現れるのは、一つにはその背後にある、啓蒙主義からロマン主義への移行という思想潮流ないし文学流派の交替を示したものだろう。理性と啓蒙の咲き誇る数世紀の描写のあとに都市の廃墟、生きとし生けるもの全ての滅亡を幻視してしまふバラトウインスキイの詩「最後の死」(22)は、この事情を明瞭に表現している。これを、デカブリスト以後の反動期における詩人の気分にもみ還元することは文学史上、正しくない。そしてまた、ロシアにおいてもこれに続いて現れる、洪水による世界滅亡の物語はまた、ヨーロッパの多くのロマン主義作家の好んで歌う題材の一つだった。

3-2 終末のスケール：1—2で述べたユートピアとしてのペテルブルグは、プーシキン(29)またはフヴォストフを転回点として、〈消え行く都市〉ペテルブルグとして、主に洪水と結び付けられてゆく(31, 32, 34, 43)。それは、ロマン主義において、啓蒙—科学—都市という価値が失墜するプロセスとパラレルであると考えられる。ドストエーフスキイでは幾度か、空中に消え行くペテルブルグという感覚が語られる。⁽⁷⁾

オドーエーフスキイ(34)ではやはり1都市の滅亡が物語られるのに対して、バラトウインスキイ(22)、オドーエーフスキイ(23)では〈終末〉は地上の全体に及ぶ。さらにドストエーフスキイ(43)ではペテルブルグの滅亡の洪水ばかりでなく、この世の全体が滅び、新しい人々の訪れる夢が語られる。また『おかしい男の夢』(47)では同じ滅亡が、第2の地球の社会全体の解体として描かれている。

3-3 終末の象徴：ペテルブルグを舞台とする終末の物語の場合、そのシンボルとなるのは多く〈洪水〉であった。先にプーシキン(30)について、楽園追放を想起したが、ここでは同時に、物語の祖形として〈ノアの洪水〉を思い出しておこう。プーシキンではまた、ヨーロッパ文学にとって伝統的なシンボル

〈黒死病〉を扱った作品もある(27)。このほかオドーエフスキイ(35)では〈ベンサムの功利主義〉, ドストエーフスキイ(43)では〈旋毛虫〉, ドストエーフスキイ(47)では〈旋毛虫, 豚, 疫病〉が, そしてツルゲーネフ(50)ではロマン主義の詩人にもどったかのように, 世界をおおう〈洪水〉が, 物語を終末に導くシンボルとして機能している。いっぽう終末を描きながら, その契機が明示されない作品(バラトウインスキイ22, ツルゲーネフ48)もある。

3-4 リアライズの方法: バラトウインスキイ(22)では〈幻〉が, またいくつかの作品において〈夢〉が(34, 43, 49), 終末を〈見る〉ための方法として用いられている。

4-0 研究方法の問題: ユートピアないし終末の描写を含む文学の現象, 系譜を扱うにあたって, 私達は従来のような材源, 影響研究を有効な研究方法とすることができない。これらの作品の相互の関連は, 個々の作品や作家同士の関わりを越える〈物語の制度〉あるいは〈ジャンルの記憶〉に関わるものとして扱われなければならない。

4-1 ユートピアのコンヴェンション: リョーフシン(10)では, 語り手は夢の中で月へと飛行する。そこは農業と牧畜の栄える家父長制の世界で, 隣人をみずからの如くに愛せ, との教えが実現している。他の天体への飛行, ユートピアの調和したたたずまい, そして引用されたまったく同じ聖書語句から, 私達は容易にドストエーフスキイ(47)を想起するだろう。『おかしい男の夢』の星間飛行はこれまで, 1861年にストラホフが「エポーハ」に載せたヴォルテールの『ミクロメガス』紹介と関係づけられてきた。ロシアでは早く1769年, マモーノフ(7)がヴォルテールの『ミクロメガス』を下敷きにして, 地球人の星間飛行を語っていることから, リョーフシンはこれを知っていたと予想される。つまりリョーフシンとドストエーフスキイは, 飛行のモチーフに関しては共通の材源を持つ, と考えられる。だがそのほかの共通点について, 2人を直接結ぶことからは何も見えてこない。ここには夢と飛行というユートピア文学の持つコンヴェンション, 1家族のような社会構成の描写, 隣人を愛せ, というこれも複数のユートピア文学に繰り返し現れる教え, が作家同士の1対1の〈影響関係〉を越えて浮かび上がっていると考えらるべきだろう。

4-2 〈物語の制度〉: 同様のことはペチョーリンとドストエーフスキイとの関係についても言える。ペチョーリンの2作(32, 33)はともに旧世界の滅亡による新しい世界の誕生を語るが, 特に後者では誇り高い若者と清浄な乙女, 聖

なるソフィアとの物語が黙示録のヴィジョンの中で描かれる。ここでは自然にドストエーフスキイ（43）が想起される。だがここでも私達は両者の直接的な関わりをよりも、両者を包み込む、より高次の〈物語の制度〉が貫徹してゆくありさまを観察すべきだろう。そしてそのとき、黙示録も、民衆のカーニバルも、神秘劇の伝統も、こうした、〈世界の変容〉を語る〈物語の制度〉のさまざまな実現として捉えられるはずだ。この物語を組織化する制度は、古代から文学作品を成立させてきたおそらくは有限な数のコードの一つなのである。

4-3 コードの機能：生命体がプログラムを持つ結晶体であるように、文学作品もまたプログラムに従って生産され、個体内部に再生産のための情報を埋め込まれ、これを次の個体に伝達し、死んで行く一つの生命体である。この遺伝子にあたる、情報機能を持つものをコードと呼ぶ。コードは、作者と作品との間に中間項または媒介項として存在する無名の存在である。無名というのは、それが無数の作者によって支えられているばかりか、同時に無数の読者によっても支えられているからである。作者は情動を表現するにあたって、先行する無数の作品が構成する〈文学の場〉に、既に了解事項として存在するコードと〈関わる〉（引用する、変形する、吸収する、誤読する、パロディ化する、解体する、対話する、メタ化する、など）。読者もまた作品内部に組み込まれた情報と、自己自身が属している〈文学の場〉のコンテクストとを関わらせることによって、解読（ないし誤読）のコードを見いだし、意味を再構成する。そして、文学研究においては、こうしたコードを視野に入れることによって、AからBへの〈影響〉、またAとBとCからのDへの〈複合的影響〉などのかたちでなされてきた関係叙述の方法の困難性をのりこえられるのではないかと考えられる。さらに作家のオリジナリティを、コンヴェンション部分と切り離して考えることができることになろう（ドストエーフスキイの夢の手法はユートピア文学にとってコンヴェンショナルなものだ、というように）。

4-4 コードの形態：コードは作者と読者とが共有する〈文学の場〉を構成し、組織化する。[12（＝使徒）]といった1語のコードがあり、また1作品の全体を1つまたは2つのコードで組織化するような、分節化された〈物語の制度〉としてのコードもある。コードには時間と空間を超える再生力の強いものと、たちまち消費され、廃棄されてしまうものがある。前者をグレート・コード、後者をマイナー・コードと呼ぶ。

現在のところ、ロシア近代文学のなかには、7つほどのグレート・コードを見いだし得ると考えられる。ここではその1つとして〈ユートピア・コードと

終末のコード〉のありさまを観察してきた。

5-0 創作方法への視点：近代ロシアの多くの作家が〈ユートピア・コードと終末のコード〉に関わってきた。コードの側から見るなら、ここにはそれぞれの作家の世界観、歴史観、思想（ドストエーフスキイは黙示録的感覚を持っていたといった〈物語の制度〉との混同など）というよりもむしろ諸作家の創作方法の基本的な性格が露出しており、ロシア文学のポエチカの発展を窺う一視覚となりうる。最後にこのことにふれておこう。

5-1 ゴーゴリ：注1)の表にゴーゴリの名前は現れない。『死せる魂』をユートピア文学として完成させなかったのは、この作家の方法が、常に〈物語の制度〉の破壊、コードを解体させる不条理の物語を志向するものであったからだと考えられる。

5-2 ユートピアとメニッペア：ドストエーフスキイの小説を構成する要素は、複数の作品と作中人物に共通して現れる次のようなものである。〈失われた楽園〉田園の黄金時代／ギリシャ／アブラハムと牧群の世界／全自然のハーモニー。〈終末〉洪水／旋毛虫／豚／黙示録。〈変容〉福音書／大地／神の観念の破壊／地質学上の大変動。〈ユートピア〉生ける水／罪の連帯／人神の共同体。このように取り出してみれば、彼の作品を構成するのはコンヴェンショナルなユートピア文学の〈物語の制度〉であるように見える。だが少なくとも文学史上のこの作家の意味はここにはない。作家として彼がおこなったことは、この制度を逆説の奔流というシンタクスの中に投げ入れたことであった。ここにドストエーフスキイのロシア文学史における新しさと役割とがあった。たとえばラスコーリニコフとソーニャの復活という黙示録ヴィジョンというコンヴェンションの中にスヴィドリガイロフを登場させ、あるいはまたこの〈物語の制度〉から最も遠く、むしろ内側から破壊してゆく機能を持つスタヴローギンに黄金時代の夢を語らせるというように。異質なものを、正反対のものを結び、背理を重ねることは、この作家のポエチカの基本的な方法、性質であった。

バフチンの用語で言い替えれば、ユートピア文学に出発点から内在しているメニッペアの世界感覚が、ドストエーフスキイによって極めて強くアクセントづけられて表現された、ということになる。夢や飛行など、メニッペアの方法を頻繁に用いる点などにもこの作家の方法の特質は現れている。バフチンのようにドストエーフスキイはこの方法を、西欧作家のなかではたとえばヴォルテールから得ている。と同時に、これまで見てきたように、ロシア近代文

学内部にもジャンルとしての可能性を秘めて（あるいは発現しつつ）生き続けていた。ロシアのユートピア文学を追うことは、また、ロシア近代文学に潜在するメニッペアの系譜を追うことと重なり合うはずである。⁽⁸⁾

5-3 チェホフ：ドストエーフスキイの方法をパラドクス、そしてメニッペアとすれば、チェホフにおいても頻繁に出合う、この〈ユートピア・コードと終末のコード〉は、パロディと断片化という、この作家のポエチカのなかに取り込まれている、といえよう。

6-0 西欧文学とフォークロア：ユートピア、アンチ・ユートピア、終末の物語のありかたは、同時代の西欧文学のなかの動きと関連し、またロシア民衆の育ててきたユートピア・イメージとも関わりを持つものと思われる。こうした点については、今後の課題としてゆきたい。

7-0 実はおそらく、ロシア近代文学の持つ意味の一つは、いま見てきたユートピアと終末とをめぐる〈物語の制度〉そのものに疑いをさしはさみ、このコードの向う側へと越え出たところにあった。ゴーゴリ、トルストイ、ドストエーフスキイ、チェホフと進むプロセスにおいてそのことは実現され、やがて20世紀の、たとえばベールイの方法へと受け継がれる。この流れのなかで、コードは戦略として使われたはずなのだ。だがそのことについては稿を改めたい。

注(1) 私達が対象とするのは具体的に〈理想境の描写を含む文学作品〉〈終末の光景の描写を含む文学作品〉である（それゆえ『ペテルブルグからモスクワへの旅』ではなく「ホチロフ」ではなく「スパスカヤ・ポレスチ」を取り上げる）。近代ロシアにおいてそうした作品はおそらく数限りなく書かれたものであろうが、ここでは以下に挙げる作品を対象として論を進めたい。表中、*印のものはアンチ・ユートピア作品、**印のものは終末の描写を含む作品である。なお、個々の作品のデータについては次の文献を参照。

В. Святловский. Русский утопический роман. Петроград, 1922; Н. П. Анциферов. Душа Петербурга. 1922.

Взгляд сквозь столетия. Русская фантастика XVIII и первой половины XIX века. М., 1977; Вечное солнце. Русская социальная утопия и научная фантастика (вторая половина XIX-начало XX века). М., 1979; Русская литературная утопия. М., 1896; Сочинения Князя М. М. Щербатова. СПб., 1896; М. Гершензон. Жизнь В. С. Печерина. М., 1910; Полное собрание сочинений Е. А. Баратынского. СПб., 1914.

- (1) М. В. Ломоносов. На день восшествия на престол Императрицы Елисаветы Петровны. 1748.
- (2) А. П. Сумароков. Сон "Счастливое общество". 1759.
- (3) Ф. А. Эмин. Приключения Фемистокла. 1763.
- (4) Ф. А. Эмин. Непостоянная фортуна, или Похождение Мирамонда. 1763.
- (5) Ф. А. Эмин. Письма Эрнеста и Доравры. 1766.
- (6) М. М. Херасков. Нума или процветающий Рим. 1768.
- (7) Ф. И. Дмитриев-Мамонов. Дворянин-философ. 1769.
- (8) Г. Р. Державин. Видение Мурзы. 1783.
- (9) М. М. Щербатов. Путешествие в землю Офирскую Г-на С...швецкаго дворянина. 1784.
- (10) В. А. Левшин. Новейшее путешествие, сочиненное в городе Белеве. 1784.
- (11) М. М. Херасков. Кадм и Гармония, древнее повествование. 1786.
- (12) М. Д. Чулков. Пересмешник. 1789.
- (13) А. Н. Радищев. Путешествие из Петербурга в Москву. 1790.
- (14) М. М. Херасков. Полидор, сын Кадма и Гармонии. 1794.
- (15) П. Ю. Львов. Росийская Памела или история Марии, добродетельной поселанки. 1794.
- (16) К. Н. Батюшков. Прогулка в Академию Художеств. 1814.
- (17) П. А. Вяземский. Петербург. 1818.
- (18) А. Д. Улыбышев. Сон. 1819.
- (19) В. К. Кюхельбекер. Европейские письма. 1820.
- (20)* В. К. Кюхельбекер. Земля Безглавцев. 1824.
- (21) Ф. В. Булгарин. Правдоподобные небылицы, или Странствование по свету в двадцать девятом веке. 1824.
- (22)** Е. А. Баратынский. Последняя смерть. 1827.
- (23)** В. Ф. Одоевский. Два дни в жизни земного шара. 1828.
- (24) Ф. В. Булгарин. Невероятные небылицы, или Путешествие к средоточию земли. 1830.
- (25) Ф. В. Булгарин. Сцена из частной жизни, в 2028 году, от рожд. Христова. 1830.
- (26) П. А. Вяземский. Разговор 7 Апреля 1832 года. 1832.
- (27)** А. С. Пушкин. Пир во время чумы. 1832.
- (28) А. Ф. Вельтман. 3448 год. 1833.
- (29) О. И. Сенковский. Ученое путешествие на Медвежий Остров. 1833.
- (30)** А. С. Пушкин. Медный всадник. 1833.

- (31)** М. Ю. Лермонтов. Наводнение. 1833.
- (32)** В. С. Печерин. Торжество смерти. 1833.
- (33)** В. С. Печерин. Вольдемар. 1833.
- (34)** В. Ф. Одоевский. Насмешка мертвеца. 1834.
- (35)** В. Ф. Одоевский. Город без имени. 1839.
- (36) В. Ф. Одоевский. 4338-й год. 1840.
- (37) В. А. Соллогуб. Тарантас. 1845.
- (38) Ф. М. Достоевский. Бедные люди. 1846.
- (39)** Ф. М. Достоевский. Слабое сердце. 1848.
- (40) И. А. Гончаров. Сон Обломова. 1849.
- (41) Н. Г. Чернышевский. Что делать. 1863.
- (42)* Ф. М. Достоевский. Записки из подполья. 1864.
- (43)** Ф. М. Достоевский. Преступление и наказание. 1866.
- (44) Н. А. Некрасов. Тарбагатай. 1870.
- (45)** Ф. М. Достоевский. Бесы. 1871.
- (46)** Ф. М. Достоевский. Подросток. 1875.
- (47)** Ф. М. Достоевский. Сон смешного человека. 1877.
- (48)** И. С. Тургенев. Разговор. 1878.
- (49)** И. С. Тургенев. Конец света. 1878.
- (50) И. С. Тургенев. Лазурное царство. 1878.
- (51)* Ф. М. Достоевский. Братья Карамазовы. 1880.
- (52) Н. Н. Златовратский. Сон счастливого мужика. 1883.
- (53) Г. И. Успенский. Выпрямила. 1885.
- (54)* А. П. Чехов. Рассказ старшего садовника. 1894.
- (2) D. B. Neuenschwander. Themes in Russian Utopian Fiction: A Study of the Utopian Works of M. M. Shcherbatov, A. Ulybyshev, F. Bulgarin, and V. F. Odоеvskij. Syracuse University, Ph. D., 1974.
- (3) С. Калмыков. В поисках “Зеленой палочки”. В кн.: Вечное солнце.
- (4) モアの『ユートピア』は1789年にフランス語より重訳, また英語からの訳はすぐ1790年に出されている。См. Святловский, стр. 33.
- (5) ここではロシア民衆にとっての失われたユートピアである〈キテシ〉, また日本をユートピアとしてイメージする〈白水境〉については扱わない。
- (6) N. Shaw. The Only Soviet Literary Peasant Utopia. “Slavic and East European Journal”, 1963. No. 3.
- (7) 注1)のアンツィーフエロフのほか, このテーマを追ったものに次の研究がある。
J. A. Gogolewski. The Theme of “Vanishing Petersburg” in Russian Literature. Vanderbilt University, Ph. D., 1969.

なお, フヴォストフとプーшкиン, さらにさかのぼってホラティウス, オウィディウスと『青銅の騎士』との関係, また河の怒りに都市が没するというヨーロッパ

詩の伝統などについては次の研究が示唆的である。

Л. В. Пумпянский. “Медный всадник” и поэтическая традиция XVIII века. В кн.: Пушкин. Временник пушкинской комиссии. 4-5, 1939.

- (8) バフチンはメニッペアの特性として、カーニバル性、自由な発想、異常なシチュエーション、生の最後のプロとコントラ、地獄、実験的幻想、心理的実験、スキャンダル、コントラストなど14点を挙げる。第11点には「メニッペアはしばしば夢や未知の国への旅行といった形をとって社会的ユートピアを描き、それはユートピア小説にまっすぐ発展することがある」とされるが、これらは本稿のテーマにとって極めて有効な視点となる。М. М. Бахтин. Проблемы поэтики Достоевского. Изд. 3-е. М., 1972, стр. 192. (邦訳169ページ。)

О композиционном законе русской литературы XVIII и XIX веков “утопия (гибель)”.

Садаёси ИГЭТА

1-0 Современный американский исследователь Д. Нойэншвандер проанализировал русские утопические произведения четырех писателей (9, 18, 21, 24, 25, 36) в следующих аспектах:

- 1 характер человека в русской утопии
- 2 окружающая среда в русской утопии
- 3 социальная система в русской утопии (образование, государственная структура, семейная жизнь, церковь)
- 4 наука и техника в русской утопии
- 5 литературная исследования в русской утопии

С этих же точек зрения и мы попытаемся рассмотреть русскую литературную утопию XVIII и XIX веков в целом.

1-1 В русской утопии человек изображается по-разному. В одних произведениях образ человека не отличается от современного нам образа. А в других произведениях особенно подчеркивается высокоразвитый разум или любовь и милосердие. В третьих — земля становится “обиталищем одних царей всемогущих” (23).

1-2 Два типа жизненной среды: урбанизм и анти-урбанизм.

1-3 “Отличительная черта русской утопии, делающая ее столь непохожей на западноевропейскую, — отсутствие в ней детальной государственной регламентации (т. е. детального законодательства — С. И.). Принцип этой

утопии такой: чем меньше государственного стеснения, тем лучше.” (С. Калмыков. В кн. Вечное солнце, стр. 14.) С этим мнением можно согласиться, однако следует обратить внимание на то, что во многих произведениях повторяется и подчеркивается правосудие.

1-4 Отношение к науке и технике в русской утопии глубоко противоречиво.

1-5 Один из наиболее часто встречающихся в этих произведениях способ изложения утопии — “сон”. (10, 13, 37, 40, 41, 45, 46, 47, 50, 52). Встречаются и такие способы, как попадание в удивительную страну в результате “необыкновенной бури” (9, 21), или полета (10, 20, 47) и т. д. Места существования утопического общества в разных произведениях различны: Петербург, Сибирь, Балканский полуостров, другая планета, Луна, Греция, и действие происходит в разные времена — в XIX веке, 2028 г., 3448 г., 4338 г. и т. д.

1-6 Мы хотим выдвинуть гипотезу для будущего типологического анализа. Можно подразделить русские утопические произведения на три группы по трем тенденциям: стремление к просвещению, которое отдает предпочтение урбанизму, разуму, науке и технике; стремление к русской общине, которое отдает предпочтение деревне, любви и милосердию и образу жизни крестьянского мира; стремление к союзу людей обновленного типа.

2-0 Русской литературе присуща и традиция ант-утопических произведений. Анти-утопическая литература критикует утопию, которая осуждает действительность.

2-1 В поэме “Медный всадник” Пушкина подвергается критике традиция петербургской оды XVIII века. В “Записках из подполья” критикуется “Четвертый сон Веры Павловны” в романе Чернышевского, “Великий инквизитор” полемизирует с итальянским утопистом Кампанеллой.

2-2 Адам и Эва, изгнанные из Божьего рая — “архетипы” изгнания Евгения из петровской утопии. Здесь “память жанра” проявляется в повествовании в виде “Божьего гнева”.

3-0 В некоторых произведениях русской литературы мир воскрешается, пережив всеобщую гибель — “конец света”, где гибель функционирует в качестве одного из сюжетов в композиции утопической литературы как в “Апокалипсисе”. А в некоторых произведениях “конец света” не что иное, как конец повествования. Мы считаем последние одним из вариантов уто-

пической литературы.

3-1 В 20-ых годах XIX-го века в России появлялось много произведений, в которых говорится о “конце света”. Это явление некоторым образом перекликается с возникновением романтизма.

3-2 Гибнущий мир изображается в разных масштабах.

3-3 В качестве причин гибели используются: “наводнение”, “чума”, “трихина”, “бесы в свиньях” и т. д.

3-4 Рассказчик видит гибель “во сне”, “в видении” и т. д.

4-0 О необходимости нового метода анализа литературной утопии.

4-1 Несмотря на наличие общих элементов в утопиях Левшина и Достоевского: полет в космос, библейское учение о любви, общий лад, трудно предположить непосредственное влияние Левшина на Достоевского. Параллели в их произведениях объясняются условностью утопической литературы.

4-2 Общее апокалипсическое видение Печерина и Достоевского можно объяснить также не “влиянием”, а “закон композиции” в утопической литературе.

5-0 Многие русские писатели прибегали к такому закону композиции “утопия (гибель)”. В отношении к этому закону отражается свойственная каждому писателю его поэтика.

5-1 Поэтика Гоголя резко противоречит закону композиции.

5-2 Как уже справедливо указал М.М. Бахтин, утопический элемент органически сочетается со всеми элементами мениппеи. Следовать за историей русской утопической литературы значит следовать за историей мениппеи в русской литературе. В утопических произведениях Достоевского сильно акцентируются все элементы мениппеи.

5-3 Пародийность и фрагментарность утопической композиции Чехова.